ニッポン臨終図巻

ドクター和の

㉘⑤　映画監督　崔洋一

「人生面白い」と言って死ねるか

僕が働く尼崎にはフィリピンパブがいくつかあって、フィリピン人女性が時々クリニックの外来に来られます。ルビー・モレノさんみたいな美しい方から、つたない関西弁で症状を訴えられると、異国の地でさぞ不安だろうと身の上話まで聞いてしまうことも。日本の男にだまされてここに来たと泣く人もいます。そんな時は、『月はどっちに出ている』をつい思い出したり…。

この作品を始め、内田裕也さんが主演の『十階のモスキート』、ビートたけしさんが主演の『血と骨』など数々の話題作を世に出した映画監督の崔洋一さんが、11月27日、都内の自宅で亡くなりました。享年73。死因は、膀胱（ぼうこう）がんとの発表です。

崔監督が体調の異変を感じたのは2019年春のこと。尿が出にくくなり、検査を受けたところ、膀胱がんの診断を受けたそうです。

膀胱がんは、膀胱内に発生するがんの総称です。症状が現れやすいため、早期発見しやすいがんのひとつです。一番顕著な症状は、「血尿」。膀胱炎でも血尿は出ますが、膀胱がんの場合は、血尿以外にあまり症状がないことが多いです。血尿以外では、頻尿や残尿感、下腹部の痛みからこのがんが見つかる人もいます。しかし、60歳を過ぎた男性の多くは、何らかの下半身の問題を抱えていることが多く、「歳のせいだろう」と棚上げにしてしまい、気がついたらがんが進行していたというケースもままあります。

崔監督は、膀胱がん発覚時に、全摘手術と人工膀胱の造設を提案されましたが、すぐに決断はできず、セカンドオピニオンを受けるなどして、自身の小腸から代替膀胱を造る方法を選択しました。この場合、ストーマ（排泄口）を付けず、尿道から排尿できるわけですが、おなかを押して腹圧を使った尿のコントロールが必要になるなど、トレーニングが必要です。監督はその1年後、全摘手術を決断しました。しかしその時には既にリンパ節などへの転移が判明し、化学療法を受けていたそうです。

そしてこの春、〈ラスト・ショー〉という名の7日間に及ぶトークライブを都内の劇場で開催。同じ膀胱がんで亡くなった松田優作作品を上映するなどして話題となりました。このイベントで崔監督は、「どうやって死んでいくか考えている？」との質問に、「とあるエッセーの連載をしたとき、死ぬ10秒くらい前に、ああ面白いと言い、10秒後に消えると書いた。それでいいですかね」と話して空を仰いだのだとか…。人生面白かった！と言いながら死ねたら最高でしょうね。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。